

## 事例 2 岡山県立林野高校

# 「育てたい生徒像」を丁寧に語り合い、方針、目標へと段階的に具体化

岡山県立林野高校では、2016年度よりカリキュラム・マネジメントの視点での教育活動の改善に取り組んでいる。その特徴は、全校規模での教職員による「育てたい生徒像」の丁寧な語り合いだ。教育活動の軸となる生徒理解を深めながら、管理職と現場、双方の意見を尊重した合意形成を図り、資質・能力ベースでの各教科の教育課程の見直しにまでつなげてきた。

### 取り組みの背景

## 次の5年間をつくるために「学力向上」以上の方針が必要

岡山県立林野高校が資質・能力を育むための学校改革に着手したのは2016年度のこと。同校の中期教育目標が設定から4年を迎え、「次の5年間のあり方」を考えるべき時代と多くの教師が感じていたと、主幹教諭の安東幸信先生は振り返る。

「教職員の間で、中期教育目標やその実現のための指導について語られることが少なくなっていました。また、ある学校評議員から『学校経営計画の重点目標が総花的で、学校としての方向性が見えない』と指摘

されたこともありました。今思えば、組織の理念が形骸化していくかどうかの瀬戸際だったのかもしれない」

また、近年、岡山県内の公立高校においてもカリキュラム・マネジメント推進の機運が高まってきたが、それは「自校の生徒に身につけさせたい資質・能力」の明確化が各校に迫られることでもあった。事実、教務課長の瀬島美穂先生は、「学力を高め、志望進路を実現する」という教育目標だけでは不十分な時代に

なった」と感じていた。

「進路の多様化や学力の多層化が進む本校の生徒に必要な資質・能力とは何かを、教師全員が明確に語れるようになり、教科はもちろん、学校行事、部活動など、学校における諸活動の軸を定めることが必要だと思うようになりました。ばらばらだった各教師の課題意識を集約し、教育活動の改善に動き始めるべき時期にきていました」（瀬島先生）

そんな中で、16年度より同校に赴任した三浦隆志校長が教師たちに着任した上で答えられるようになることを目指し、同校は動き始めた。

### 岡山県立林野高校

- ◎校訓は「すべては光る 個性の輝き」。課題解決力・コミュニケーション能力など、社会人として必要な能力の育成を目的として、地域をフィールドにした探究活動を「総合的な学習の時間」で展開する。2年次からは、一人ひとりの個性や志望に応じて5つのコースから学習プログラムを選択する。
- ◎設立 1908（明治41）年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約140人
- ◎2017年度入試合格実績（現役のみ）  
国立大は、島根大、愛媛大、岡山県立大などに17人が合格。私立大は、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ92人が合格。
- ◎URL <http://www.hayasino-okayama-c.ed.jp/>



岡山県立林野高校校長  
**三浦隆志** みうら・たかし  
教職歴34年。同校に赴任して2年目。



岡山県立林野高校  
**安東幸信** あんどう・ゆきのぶ  
教職歴29年。同校に赴任して8年目。主幹教諭。地域連携担当。数学科。



岡山県立林野高校  
**瀬島美穂** せじま・みほ  
教職歴27年。同校に赴任して8年目。指導教諭。教務課長。理科。



岡山県立林野高校  
**桐野和也** きりの・かずや  
教職歴7年。同校に赴任して5年目。数学科。



岡山県立林野高校  
**川上裕司** かわかみ・ゆうじ  
教職歴3年。同校に赴任して2年目。保健体育科。

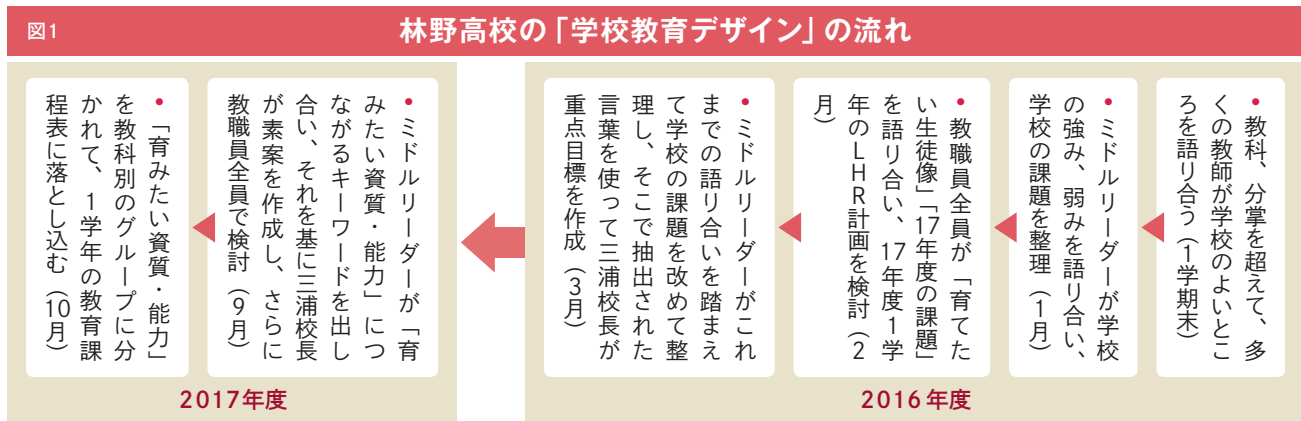


写真1 ミドルリーダーが集まり、学校の現状を整理するために、学校の強み・弱み、学校を取り巻く外部環境におけるチャンスと脅威を洗い出した。

林野高校がまず着手したのは、「総花的」と指摘された学校経営計画の重点目標の見直しだ。そしてそれを、教師一人ひとりが自分事として捉えられるようにするためにも、できるだけ多くの教師がかかわりながら進める必要があった。そこで、三浦校長が最初に行ったのは、「現在の林野高校のよいところを言語化し、共

## ステップ1 学校経営計画における具体的な重点目標を設定する

### 生徒への思いを語り、具体的な「第一歩」を刻む

学校の教育方針を定める ● 2016年度

有していく」という活動だ。

「まずは先生方の気持ちを一つにするため、1学期の終わりに、『1学期を振り返って、よかったこと、2学期にも続けたいこと』を皆で語り合う場を設けました。日々の教育活動の成果に目を向け、自分たちの指導に自信を持つことが、大きな改革を進める上での下地になると考えたからです」(三浦校長)

学校として継続すべき活動、今後も伸ばしていくべき領域に目を向けることで、取り組むべき課題に自信を持って向き合うことができる状態を教師の内面に整えた後、同校は1月から学校経営計画の重点目標の見直しに移った。1月には、ミドルリーダー約15人が集まり、学校の強みや弱みなどを話し合い、学校の現状

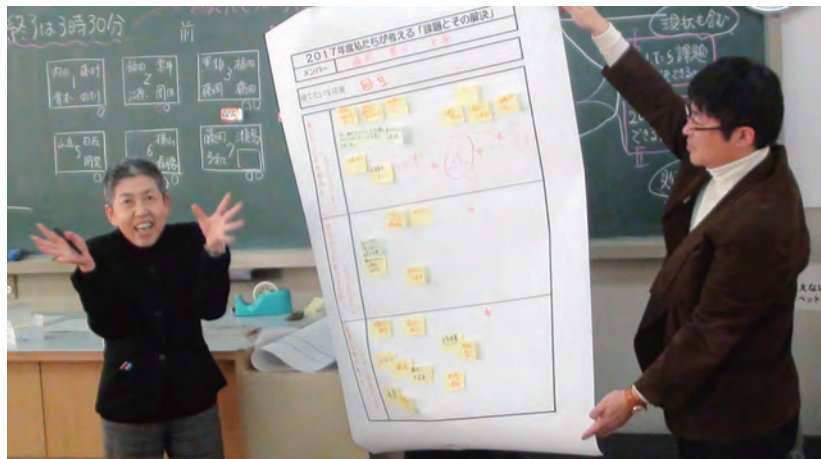


写真2 全教職員がグループに分かれて、「育てたい生徒像」を実現する上で鍵になると考えられる項目を挙げ、具体的な打ち手を考えた。学校をよりよいものにするための様々なアイデアを、全教職員が分掌や年齢にとらわれず、熱く語り合った。

を整理する活動を行った(写真1)。「17年度入学生志願倍率が芳しくない状況も把握していましたが、『なぜ、そうなっているのか』『何を解決すればよいのか』を4つのグループに分かれて話し合いました。解決策がすぐに見えてきたわけではありませんが、同じ学校に勤めていても、教科・分掌によって思いや考え方は様々なのだと改めて分かり、

また、自分が見逃していた課題への気づきもありました」（安東先生）

2月には、全教職員が参加し、3時間にわたって「育てたい生徒像」と「17年度の課題」を語り合った（P.11写真2）。三浦校長は、「生きて働く『知識・技能』『思考力・判断力・表現力等』『学びに向かう力・人間性等』の資質・能力の3つの柱を踏まえて議論するように教職員に伝えた。それまでの活動を通して、自分の考えを同僚に語ることに対して抵抗感がなくなっていたため、何人も教職員が率先して生徒への思いを熱く語ったという。

「議論を机上にとどめないために、『育てたい生徒像を踏まえて、17年度の1学年団に1学期のLHR計画を提案する』という具体的な課題も盛り込みました。学校の課題に立ち向かえる組織開発の具体的な一歩になったと手応えを感じました」（三浦校長）

## 教師の言葉を盛り込み 重点目標を練り上げる

3月には、17年度の学校経営計画における重点目標の設定へと進んで

いった。1月からの一連の議論の「まとめワーク」と位置づけて、再度、ミドルリーダー十数人が集まり、重点目標を立てる上で必要なキーワードを洗い出した。キーワードは一つひとつ付箋に書き出し、それらをグループピングしてカテゴリー名称をつけていった。そして、そのカテゴリー名称は、17年度の重点目標設定における重要な柱となった。

最終的には、学校や地域の現状と課題、「育てたい生徒像」を踏まえて、三浦校長が重点目標として整理し、全教職員に提示した（図2）。

「三浦校長から提示された重点目標には、教職員同士で語り合った時に出てきた言葉が盛り込まれていました。教職員がお互いの思いや考えを知った上で、一歩を踏み出す方向性を共有できたという納得感がありましたし、自分が何をすべきかが整理できました」（瀬島先生）

林野高校においても「これまで、学校経営目標などは、自分に関係のある項目しか目を通していなかった」と打ち明ける教師は少なくなかった。だが、対話の中で生まれた言葉を使って、端的に語られる17年度の重点目標には、全教師が分掌を

超えて細部まで目を通すことができた。

「1年前、重点目標を『総花的だ』と指摘した学校評議員も、『学校として何をしたいのかがはっきり分かるようになりましたね』と評価してくださいました」（安東先生）

17年度の学校のあり方を語り合う活動からは、桐野和也先生、川上裕司先生のような若手に、教師としての自信を育む成果も得られた。

「先生方と語り合う中で、自分のこれまでの指導にはそういう意味があったのだと理解が深まる瞬間が何

度もありました。今後の学校のあり方について語りながら、過去を冷静に振り返り、自分に対しても自信を深める貴重な体験ができました」（桐野先生）

「最初、三浦校長に『生徒にどんな力をつけたいか』と聞かれた時は、自分が何を問われているのかが分かりませんでした。でも、今は、学校の重点目標を踏まえて、生徒にどんな力をつけたいのか、保健体育科の1人として自信を持って答えられます」（川上先生）

図2

### 17年度の具体的な学校経営目標・計画

#### 生徒

- 1 授業や学習方法を改善する取組を通じて、生徒が学び続ける力を身につける。【教務、進路指導】
- 2 学校行事や部活動や社会貢献活動などを通じて、生徒が主体的に取り組む力を身につける。【生徒】
- 3 ESDの視点からグローバル人材養成の取組を通じて、広い視野と豊かな心を身につける。【教務】
- 4 体系的な指導体制を通じて、生徒が主体的に自らのキャリアを形成し、目標を実現する。【進路指導】
- 5 個々の生徒の心身の充実を図り、生徒の自己肯定感があがる。【生徒、厚生】

#### 教職員

- 6 創立110周年の準備を進めるとともに、将来の林野高校を構想する準備を始める。
- 7 開かれた学校づくりを進め、学校の魅力を、中学生やその保護者、地域の方々へ効果的に発信する。
- 8 長期的視野に立って、ミドルリーダーを中心とした組織的な学校運営により、教職員が円滑かつ効果的な教育活動を展開し、組織開発を進める。

\*学校資料を基に編集部で作成



ステップ2 方針を教育目標に落とし込む・2017年度

## 教育目標を資質・能力ベースで整理。 各教科の指導へつなげる

### 資質・能力の形で 教育目標を言語化する

学校経営計画における重点目標をより学校や地域の実情に合った形に見直したことで、教師たちの内面に「学校全体の方針を授業に落とし込むこと」、授業が今まで以上に生徒に合ったものになるのではないかとといった期待感がおのずと高まってきた。

「17年度の重点目標を生徒に伝えるべき一番の場は、言うまでもなく授業です。しかし、HR活動や部活動に比べると、授業には学校全体の方針をそのまま落とし込みにくいのも事実です。そこで、学校教育目標を資質・能力の形で定義して、カリキュラム・マネジメントの視点で各教科に落とし込み、それぞれの指導計画を立てていきたいと考えました」（三浦校長）

17年9月、学校教育目標を「生徒に育みたい資質・能力」ベースで教

職員全員が語れるようになることを目的に、まずはミドルリーダーを対象にした2日間の活動が行われた。

本誌6月号・8月号特集で取り上げた学校教育デザイン策定の実践事例（山梨県立吉田高校、広島県立尾道北高校など）にミドルリーダーが目を通した上で、まず1日目に、それぞれが「育てたい生徒像」をキーワードの形で書き出してから、グループに分かれてキーワードを分類した（写真3）。そして2日目には、「育

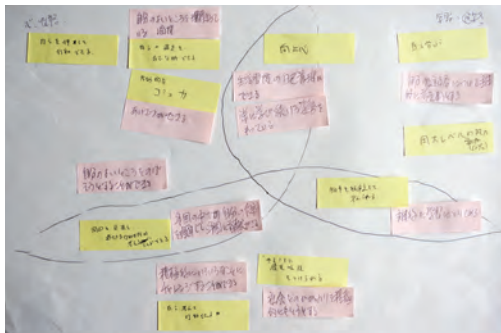


写真3 「育てたい生徒像」を考えられるだけ書き出してから、思考ツールのYチャートなどを使って整理していった。

てたい生徒像」は、資質・能力ベースにするどのような言葉で表現されるのかを考えていった（写真4）。

「2日間の活動を通して、『学び続ける』『他者を承認する』『自己肯定感を持つ』など、普段の学校生活の中で本校の教師が大切にしている言葉が浮かび上がってきました。そこで出てきた言葉を基に、『育てたい生徒像』を資質・能力ベースどのように記述するか、私がたたき台（P.14図3）を作った先生方に提示しました」（三浦校長）

たたき台を教職員に提示する際、三浦校長は「先生方の中にはこの学校が長年何を大切にしてきたのか、私よりもよく知っている方も多い。

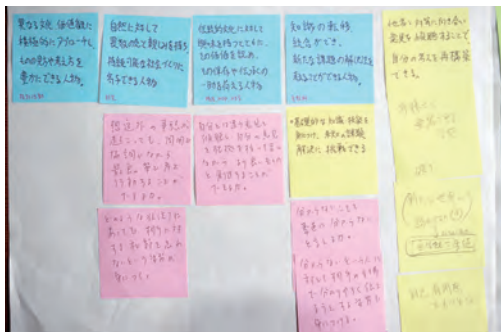
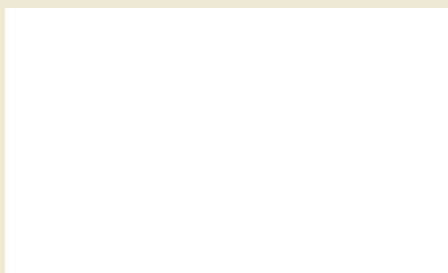


写真4 「～な場面、～ができる」といった表現になるように意識しながら、自校で育みたい資質・能力を考えていった。

## 16年度の校内議論を生かし、 「生徒の対話の場」を 17年度新入生に提供

林野高校では、16年度末、学校経営計画における17年度の重点目標を検討する過程で、「17年度の1学年団に提案するLHR計画」を練り上げた。その計画は17年4月、新入生に対して120分間の学年企画として実施された。入学したばかりでまだお互いのことをよく知らない生徒同士が、気軽に語り合えるテーマから高校生活の夢や期待などへと語り合いを深め、最後に高校3年間をどのように過ごしたいかを各自宣言することで、進路選択や教科学習に主体的に取り組む素地を養った。



仲間と夢や希望を語り合うことで、「目標実現を支える関係づくり」が意識される。今後のHR活動に生かしてもらうことも、ねらいの1つだった。

図3

### 校訓：すべては光る個性の輝き

<育てたい生徒像>

～「どんな生徒を育てるのですか」という問いに対する答え  
→「HAYASHINO'S羅針盤」(仮)

- ・知識や技能を受け入れ、活用することができる。
- ・他者を承認し、協働することができる。
- ・社会や自然と係わることができる。
- ・多様な中から、新たな価値を見つけることができる。



図4

<育てたい生徒像>

～「どんな生徒を育てるのですか」という問いに対する答え

### The Next Stage of Hayashino HS

### 校訓：すべては光る個性の輝き

- ・知識や技能を身につけ、活用することができる。
- ・自己や他者を認め、協働することができる。
- ・見通しをもって社会や自然と係わることができる。
- ・多様な中から新たな価値を見出すことができる。

教職員から出された意見を基に三浦校長が素案を作成(図3)。三浦校長作成の素案をたたき台にして、教職員が意見を出し合い、「育みたい資質・能力」を言語化した(図4が完成版)。

ぜひ、率直な意見を聞かせてほしい」と訴えた。

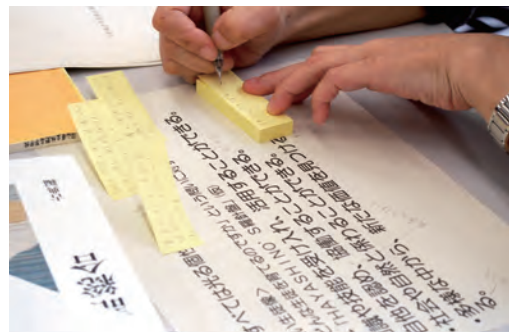
「『育てたい生徒像』を資質・能力ベースで語ることは、本校にとって初めての挑戦でした。言葉は時として大きな影響力を持ちます。だからこそ、歴代の校長、そしてずっと本校で働いてきた先生方の思いも受け継ぐような言葉で、『生徒に育みたい資質・能力』を語れるようにしたい」と思い、先生方に「意見をください」とお願いしました(三浦校長)

三浦校長の呼びかけに応じて、教職員からは様々な意見が出され、たたき台に対して改善が加えられた(図4)。それも16年度からの活動で、

自分の思いや考えを語り合える文化が教職員の中に育まれたからだろうと三浦校長は評価する。

## 授業改善のポイントが次々に見えてくる

10月には、自校に合った言葉で明確化された「生徒に育みたい資質・能力」を、教科指導に落とし込むための活動が行われた。各教科の文脈で捉えた、育成を目指す資質・能力の明確化、そして評価の観点に基づき、いつ、どのように指導するのか、18年度1年生の教科書を見ながら教科別のグループで語り合い、教育課



学校教育目標として育成を目指す資質・能力が、自分の教科・科目では「何ができるようになる」ことをまずは一人ひとり考え、その結果を付箋に書き出すなどしていった。

程表のフォーマットに記入した(図5)。

「育みたい資質・能力」を、自校の生徒に合った言葉や教科・科目の文脈で言語化することは決して容易なことではない。それは同校の活動においても同様だった。例えば英語科では、動物を題材に取り上げた単元で育みたい資質・能力が、「生き物の生態を理解する」といった記述でとどまっていた。しかし、教科団での話し合いが進むと、「自然と人間の共存を題材に、相反する事項をどのように両立させるか、論理的に思考できるようにする」といったレベルまで高めることができた。「育みたい資質・能力」の言語化



一人ひとりが考えたことを教科団で共有する。それを基に、各教科・科目の各分野・単元で、「何ができるようになる」ことを目指すのかを、具体的に語り合った。

は、簡単ではないからこそ教師の協働が不可欠であり、そして協働があるからこそ、教師の中の気づきが極めて多彩になるのです(三浦校長)。「育みたい資質・能力」の言語化が進むにつれて、授業改善のアイデアが次々に飛び出してきた。例えば、保健体育科では、育成を目指す資質・能力を意識すると、ゲームを楽しんだり、記録を競ったりするだけではなく、他者評価を取り入れるなど、従来にはない指導案が生まれた。また、「教育課程表に書き込みながら学習指導要領を見た時に、そこに書かれてある言葉が今まで以上に自分事として心に響いたことに驚いた」といった声も上がった。



図5

数学の教育課程表

分野・単元	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
育成を目指す資質・能力	数と式	集合と命題	二次関数	図形と計量	データの分析	式と証明						
知識や技能を身につけ、活用することができる。	二次の乗法公式及び、因数分解の公式の理解を深め、式を多面的に見たり、目標に応じて変形したりすることができる。	集合と命題に関する基本的な概念を理解することができる。	二次関数の値の変化についてグラフを用いて考察したり、最大値や最小値を求めたりすることができる。	正弦定理や余弦定理について理解し、それらを用いて三角形の辺の長さや角の大きさを求めることができる。	四分位偏差、分散、標準偏差など統計の基本的な考えを理解することができる。	三次の乗法公式及び、因数分解の公式を理解し、それらを用いて式の展開や因数分解をすることができる。 整式の除法や分数式の四則演算について理解し、簡単な場合について計算することができる。 二次方程式の解の判別及び、解と係数の関係について理解することができる。 因数定理について理解し、簡単な高次方程式の解を因数定理などを用いて求めることができる。						
自己や他者を認め、協働することができる。		集合と命題に関する証明を論理的に扱うことができる。		三角比を平面図形や空間図形の考察に活用できる。	データの傾向を理解し、説明することができる。	等式や不等式が成り立つことを、それらの基本的な性質や実数の性質などを用いて証明することができる。						
見通しをもって社会や自然とかわることができる。	不等式の解の意味や性質を理解し、事象の考察に活用できる。		二次方程式の解と二次関数のグラフの関係を理解できる。	鋭角の三角比の意味と相互関係を理解できる。	散布図や相関係数の意味を理解し、それらを用いて2つのデータの相関を把握できる。							
多様な中から新たな価値を見いだすことができる。	数を実数に拡張する意味が理解できる。		事象から二次関数で表される関係を見いだすことができる。	三角比を鈍角まで拡張する意義が理解できる。		数を複素数まで拡張する意義を理解することができる。						

\*学校資料を基に編集部で作成

今後の展望

育成を目指す資質・能力を軸に  
教職員のチーム化を進める

検討のプロセスを記録しながら、協働性を高めていく

「育てたい生徒像」から育成を目指す資質・能力を整理し、それらを踏まえた各教科・科目の教育課程の検討を進めてきた林野高校。学校としての今後の方向づけを行ってきたわけだが、その成果は個々の教師の意識の変化にも見られる。

「育成を目指す資質・能力を自教科に落とし込む形で語り合ったことで、授業の合間など、ちょっとした時間での先生方との会話の質が変わってきたように感じます。経験の浅い私ですが、何を目標にどのような指導をするのか、少しずつですが、具体的に他教科の先生方とも話せるようになってきました」（川上先生）

教科を超えた結びつきの強まりは、桐野先生も感じているという。

「今後は『総合的な学習の時間』の開発においても、教科の枠を超えた連携を図っていきます。2年にわ

たった教職員間の協働は、様々な面でプラスに働くはずですよ」（桐野先生）

安東先生、瀬島先生も、「今回の一連の活動を通して、教師がねらいや思いを共有しながら指導力を高め、それを若手に引き継いでいくことの大切さを改めて感じた」と、教師間の協働の大切さに言及する。そうした言葉を受けて、三浦校長は、「協働が大切だからこそ、検討の過程を形に残すことが重要だ」と説明する。

「カリキュラム・マネジメントの進め方は学校によって異なるため、こうすればよいという正解はありません。不断の見直しが必要だからこそ、『育てたい生徒像をこのように捉え、あるべき指導をこのように考えてきた』といった記録を残せば、以降の見直しはスムーズに進むと思います。そして、教職員の語り合いの記録は、次年度以降にも生きる財産になるはずですよ」（三浦校長）